

6. 社会連携

(1) 公開講座

センターでは、1986年度から毎年1回、市民向けの公開講座を開催している。テーマは、近年の研究潮流、スラブ・ユーラシア地域の動向、一般市民の関心などを考慮して選択されている。講師としては、センター教員のほか、他部局の教員、他大学の共同研究員、当該問題の専門家などが選ばれている。毎年のようにセンターの公開講座を受講している市民も多く、センターでは、毎年度アンケート調査を行って、公開講座の内容や運営の改善をはかっている。

2006年度

第21回公開講座「多様性と可能性のコーカサス:民族紛争を超えて」

実施期間:2006年5月12日～6月2日 受講者数:85人 開催責任者:前田弘毅

講義内容	講師
① ロシアのイスラム政治とダゲスタンのスーフィズム	北海道大学スラブ研究センター 教授・松里公孝
② コーカサスをめぐる国際政治:求められるバランス 外交	東京外国語大学 講師・廣瀬陽子
③ 野戦軍司令官からジャマーアット・アミールへ	東北大学 教授・北川誠一
④ コーカサス・ダンスとディアスポラ(トルコの例)	東京外国語大学 講師・松本奈穂子
⑤ 「コーカサスの虜」たち:ロシア文学に表れた コーカサスのイメージ	山形大学 助教授・中村唯史
⑥ 中央アジアとコーカサス:近くて遠い隣人?	北海道大学スラブ研究センター 助教授・宇山智彦
⑦ コーカサス史の転回 ～歴史における「境界」と「中心」～	北海道大学スラブ研究センター 講師・前田弘毅

2007年度

第22回公開講座「拡大する東欧」

実施期間:2007年5月14日～6月4日 受講者数:84人 開催責任者:家田修

講義内容	講師
① 「東欧」への眼差し—戦略としての地域	北海道大学スラブ研究センター 教授・林忠行
② ディアスポラの聖地:ウクライナで復活したユダヤ 人巡礼から見えてくるもの	北海道大学スラブ研究センター 学術研究員(COE)・赤尾光春
③ 国家と宗教:旧ユーゴスラヴィアの例	東京大学 博士課程・長島大輔

④ 異国の中の祖国:ブルゲンラント・クロアチ人の過去、現在、未来	京都大学 教授・三谷恵子
⑤ 戦争と原発事故とベラルーシ人の国民形成	北海道大学スラブ研究センター 学振特別研究員・越野剛
⑥ ヨーロッパの「一員」か「隣人か」:ウクライナ・アイデンティティの歴史の変遷	明治大学 非常勤講師・光吉淑江
⑦ 消滅、それとも拡大する東欧	北海道大学スラブ研究センター 教授・家田修

2008 年度

第 23 回公開講座「現代ロシアをめぐる7つの問い」

実施期間:2008年5月12日～6月2日 受講者数:86人 開催責任者:望月哲男

講義内容	講師
① ロシアは「普通の先進国」になれるか? (ロシア経済の方向性を考える)	北海道大学スラブ研究センター 教授・田畑伸一郎
② メドヴェージェフとは誰か? (ポスト・プーチンの政治を語る)	愛知淑徳大学 教授・皆川修吾
③ ロシア・サッカーはどこへ行くか? (スポーツから社会を見る)	天理大学 准教授・大平陽一
④ ロシアでどんな映画が人気を呼んでいるか? (映画から世相を見る)	同志社大学 非常勤講師・扇千恵
⑤ ロシアは誰に住みよいか? (社会生活・格差問題を考える)	大阪産業大学 教授・大津定美
⑥ ロシア知識人は何を考えているのか? (言語・思想界の状況を語る)	横浜国立大学 准教授・大須賀史和
⑦ トルストイは「復活」するか? (文学から社会を見る)	北海道大学スラブ研究センター 教授・望月哲男

2009 年度

第 24 回公開講座「世紀を超えて:東欧革命後の 20 年を振り返る」

実施期間:2009年5月11日～6月1日 受講者数:86人 開催責任者:野町素己

講義内容	講師
① 変わる政治: EU 加盟は東中欧政治にどのような影響を与えたのか?	北海道大学スラブ研究センター 教授・林忠行
② 変わる宗教世界: キリスト教 2000 年と共産主義	国立民族学博物館 准教授・新免光比呂
③ 変わる経済地図: 比較経済後進性論の視点から	西南学院大学 教授・上垣彰
④ 変わる環境問題: ドナウ川ダム建設問題とその行方	北海道大学スラブ研究センター 教授・家田修

6. 社会連携

⑤ 変わる文学：21世紀の世界文学に向けて	東京大学 教授・沼野充義
⑥ 変わる歴史認識：歴史修正主義の諸問題	東京大学 教授・柴宜弘
⑦ 変わる言語地図：「多言語化」するスラブ世界	北海道大学スラブ研究センター 准教授・野町素己

2010年度

第25回公開講座「地域大国比較の試みーロシアを中国やインドと比べたら何が分かるか？」

実施期間：2010年5月10日～31日 受講者数：87人 開催責任者：田畑伸一郎

講義内容	講師
① ロシア、中国、インドの共通性ー経済の視点から	北海道大学スラブ研究センター 教授・田畑伸一郎
② アフガニスタンをめぐる「小さな冷戦」ーロシア、中央アジア諸国、中国、インドー	大阪大学世界言語研究センター 教授・山根聡
③ 新興3カ国の連携の思惑と限界ー国際政治学の視点から	防衛大学校 准教授・伊藤融
④ BRICsの台頭と世界経済の行方	神戸大学経済経営研究所 准教授・佐藤隆広
⑤ 中国の連環画・ポスターに見えるロシア・ソ連イメージ	北海道大学 教授・武田雅哉
⑥ 都市＝農村関係の中露比較	東京大学 准教授・田原史起
⑦ グレートゲーム再考ー中央アジアから見た英中露帝国	北海道大学スラブ研究センター 教授・宇山智彦

2011年度

第26回公開講座「スラブ・ユーラシアで躍動する人々」

実施期間：2011年5月9日～30日 受講者数：88人 開催責任者：長縄宣博

講義内容	講師
① ロシア人：歴史における拡張と統合	静岡県立大学 教授・西山克典
② アルメニア人：文明の潮目で	東京外国語大学 研究員・吉村貴之
③ ドイツ人：二度の大戦に翻弄された人々	愛知県立大学 講師・半谷史郎
④ ユダヤ人：共存と排除の200年	立教大学 特任教授・高尾千津子
⑤ タタール人：祖国とイスラーム世界の狭間で	北海道大学スラブ研究センター 准教授・長縄宣博

⑥ 中国人:脅威と共生の間で	富山大学 教授・堀江典生
⑦ 日本人:ロシア極東における戦争と水産業	新潟国際情報大学 准教授・神長英輔

2012年度

第27回公開講座「ユーラシアの自然と環境は誰が守るのか」

実施期間:2012年5月11日～31日 受講者数:55人 開催責任者:家田修

講義内容	講師
① ドナウ中流域と環境汚染事故への対応	北海道大学スラブ研究センター 教授・家田修
② 中央ユーラシアの人と自然の歴史:ユーラシア深奥部の眺め	総合地球環境学研究所 教授・窪田順平
③ ドナウ・デルタをめぐる国際法レジームのダイナミズム	北海道大学 教授・児矢野マリ
④ 中央アジアの政治史と水	北海道大学スラブ研究センター 研究員・地田徹朗
⑤ 松花江の汚染と北東アジア水域	鳥取環境大学 准教授・相川泰
⑥ アムール・オホーツク巨大魚附林と東アジア地域協力	北海道大学 教授・白岩孝行
⑦ 東アジアの環境リテラシー	日本大学 助教・山下哲平

2013年度

第28回公開講座「ユーラシアの現代と宗教」

実施期間:2013年5月13日～6月3日 受講者数:80人 開催責任者:松里公孝

講義内容	講師
① メッカへの道:イスラーム大国ロシア	北海道大学スラブ研究センター 准教授・長縄宣博
② 現代ロシア若者の宗教事情:正教会を中心に	大阪大学・同志社大学 講師・有宗昌子
③ 現代ロシアにおけるユダヤ教の現状	大阪大学 助教・赤尾光春
④ 伝統宗教か、それとも精神修養の糧かー現代ロシアと仏教	青山学院大学 講師・荒井幸康
⑤ アルメニア使徒教会とアルメニア、カラバフにおける自治体建設	北海道大学スラブ研究センター 教授・松里公孝

6. 社会連携

⑥ 現代ロシアの呪術リバイバル	総合地球環境学研究所 上級研究員・藤原潤子
⑦ 拡散するジハード(聖戦)の大義:現代イスラームの動向と南アジア	大阪大学 教授・山根聡

(2) 公開講演会

センターは、国際シンポジウムをはじめ国内外の研究者を招いて先端的な研究を議論する場を多く設けており、また特定のテーマに沿って講師陣を集めた公開講座も開いているが、専任教員が日常におこなっている研究の成果を一般向けに話す機会は必ずしも多くなかった。そこで、専任教員の最新の研究内容やスラブ・ユーラシア地域の最新事情を、市民・学生・ジャーナリストなどに向け広く公開するための企画として、「スラブ研究センター公開講演会」を定期的で開催することにした。年 4 回の定例公開講演会を開いている。

2012 年度

月 日	講 師	講 演 会 名	人 数
6 月 29 日	宇山智彦	中央アジアから見る世界の「今」 -「民主化」とユーラシア国際秩序再編	60
9 月 28 日	野町素己	岐路に立つマイノリティー多言語社会を生きるバナト・ブルガリア人とその言葉	30
12 月 12 日	望月哲男	19 世紀ロシア文学の読み方 -ドストエフスキー、トルストイの古さと新しさ	50
3 月 13 日	岩下明裕	日本の領土問題を考える:竹島・尖閣・北方領土	90

2013 年度

月 日	講 師	講 演 会 名	人 数
6 月 28 日	田畑伸一郎	最近の日ロ経済関係を読み解く	70
9 月 28 日	家田修	チェルノブイリと福島を地域と世界から考える	40

(3) 北海道スラブ研究会

センターでは、北海道内の研究者およびスラブ地域に関心を持つ一般の人々との連携を深めるという趣旨のもと、道内の研究者・市民の方々と共に「北海道スラブ研究会」を1970年代より主催してきた。同会では毎年1回定例の総会・報告会をおこなうほか、内外の専門家を招いて研究会を開催している。参加人数はテーマによって20名～50名程度。

2009年度までは総会参加者より会費を徴収していたが、2010年度からそれを廃止した。近年は大型プロジェクトによるセミナーがひんぱんに行われることもあり、研究会の開催は減りつつある。一般の人々との連携という使命の大部分は上述の公開講演会などに譲ったが、センターの新任研究者の紹介や、外国・道外から特色ある研究者が来訪した際の講演の場として本研究会を活用している。

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
開催回数	5	8	8	2	4	1	2

(4) 研究所公開

創成研究機構、低温科学研究所、電子科学研究所、遺伝子病制御研究所、スラブ研究センターは、北大祭期間中の2013年6月8日(土)に合同で一般公開を開催した。その結果、延べ3300人以上(うちセンターには二百数十人)の方に参加していただいた。

電子研、低温研、遺制研は2012年度から合同一般公開を行っているが、スラブ研究センターは2013年度初めて参加した。

展示としては、センターの歴史や出版物の紹介のほか、センターの教員・研究員・大学院生の協力により、中央アジア・モンゴルのカラフルな民族衣装や帽子、ロシアのマトリョーシュカやサモワールをはじめとする工芸品、スラブ・ユーラシア諸国の紙幣などを用意した。また、2013年度の外国人特任教員のイリヤ・ザイツェフ氏(ロシア科学アカデミー東洋学研究所)の提供により、タタール人のイスラーム芸術の一つである絵(シャマーイル)も展示した。くわえて、専任研究員による講演も行い、ユーラシアの国境問題、ロシアの国と風土のイメージ、そして地域研究のあり方などが論じられた。その他、国境問題・境界地域に関するDVDを随時上映した。

6. 社会連携

(5) 一緒に考えましょう講座

センターでは、家田修を中心として、チェルノブイリや福島での原発事故を広い視野から市民と共に考える公開講座「一緒に考えましょう講座」を2011年10月に立ち上げ、おおむね月に一度の割合で研究者、民間組織の専門家、被災者などを招いて講演会兼討論会を開催している。チェルノブイリはスラブ文化の故地であるポーランドと重なり、言語学的にも民俗誌的にも重要な地域である。福島などの地域的な背景を含めて、原発問題や放射能汚染問題を深く学ぶことで、参加者(市民・専門家)の原子力・放射能リテラシー向上に役立てている。

- 第1回 「原発ってなんだろう？」(2011/10/28-10/29)
- 第2回 「フクシマと私たち」(2011/12/3)
- 第3回 「大震災と海洋汚染」(2012/1/14)
- 第4回 「内側から見た電力と社会の変容」(2012/2/16)
- 第5回 「低線量被曝と向き合う」(2012/4/7)
- 第6回 「自分で放射能を測ろう」(2012/5/25)
- 第7回 「国際社会は日本をどう見ているのか」(2012/6/9)
- 第8回 「福島避難者の声を聞こう」(2012/8/10)
- 第9回 「原発被災地 飯舘村のいま:地域の視点から」(2012/11/10)
- 第10回 「シェーナウの想い～自然エネルギーを子どもたちに」上映会 (2012/11/22)
- 第11回 「東京原発」上映会 (2012/12/10)
- 第12回 「相馬看花:第一部 奪われた土地の記憶」(2013/1/9)
- 第13回 「原発訴訟のゆくえ」(2013/1/26)
- 第14回 「未来に伝えるべきこと」(2013/3/9)
- 第15回 「飯舘村のいま」(2013/6/18)
- 第16回 「福島以後を大学生と市民の対話で考える」(2013/7/16)
- 第17回 「地産地消の新エネルギー:可能性と問題点」(2013/8/7-8/9)

(6) 博物館展示・市民セミナー・移動展

センターが中心となって組織している北大グローバル COE「境界研究の拠点形成」は、研究成果を研究者だけでなく一般市民にも広く還元すべく、北大総合博物館における展示や博物館土曜市民セミナーを開催している。また、日本各地で移動展を開催することにより、都市部にとどまらない各地の市民に境界研究の成果を還元している。

【GCOE 博物館展示・土曜市民セミナー】

第1期展示「ユーラシア国境の旅」

(2009/10/3-12/8)

第2期展示「知られざる北の国境-北緯 50 度の記憶」

(2009/12/18-2010/5/10)

第3期展示「海疆ユーラシア:南西日本の境界」台湾-沖縄地域編

(2010/05/14~9/11)

第4期展示「先住民と国境 北米先住民ヤキの世界」

(2010/11/19~2011/2/13)

第5期展示第1部「言語は境界を超えて-ロシア・東欧作家の作品と世界」

(2011/05/13~8/21)

第5期展示第2部

「言語は境界を超えて-カフカ、ザウスキ、セリモヴィッチ、ウイソホルスキ編」

(2011/08/26~11/20)

第6期展示「越境するイメージメディアにうつる中国」

(2011/11/1~2012/5/13)

第7期展示「北極圏のコミュニケーション-境界を越えるサーミ」

(2012/5/25~2012/12/27)

第8期展示「知られざるカムチャツカ-ロシアから見た境界のイメージ」

(2013/1/25~2013/5/26)

第9期展示 第1部「境界研究-日本のパイオニアたち-工藤信彦・香月泰男」

(2013/6/1~2013/8/25)

第9期展示 第2部「境界研究-日本のパイオニアたち-秋野豊・宮本常一」

(2013/9/1~2013/10/27)

6. 社会連携

【移動展示】

「知られざる北の国境『樺太と千島』」

2010年10月3日(日) / 釧路市生涯学習センター「まなぼつと」ハイビジョンシアタールーム

2010年10月22日(金)～11月4日(木) / 場所:九州大学中央図書館3階

「知られざる日本の国境」

2010年11月9日(火)～14日(日) / 対馬市交流センター3階展示ホール

2010年11月16日(火)～11月23日(火) / 上対馬総合センター2階研修室

2010年12月21日(火)～12月26日(日) / 沖縄県立博物館・美術館 1階県民ギャラリー3

「樺太日露国境標石と樺太絵葉書」

2011年1月20日(木)～2月15日(火) / 函館中央図書館展示ブース

「樺太ー知られざる北の国境」

2011年7月16日(土)～8月31日(水) / オホーツクミュージアムえさし

2011年9月5日(月)～9月30日(金) / 浜頓別町役場1階ロビー

2011年10月6日(火)～11月6日(日) / 士別市立博物館

2011年8月6日(土)～8月28日(日) / 稚内市北方記念館

2011年9月1日(木)～9月25日(日) / 利尻町立博物館

2011年9月27日(火)～10月23日(日) / 利尻富士町カルチャーセンター

2011年11月4日(日)～11月6日(日) / 礼文町びすか21

「千島・樺太・北海道アイヌのくらしドイツコレクションを中心に」

2011年10月6日(木)～12月6日(火) / 国立民族学博物館

「北米先住民ヤキの世界」東京巡回展

2012年2月2日(木)～2月16日(木) / 早稲田大学ワセダギャラリー

「樺太ー知られざる北の国境」展

2012年5月1日(土)～5月13日(日) / 天塩川歴史資料館(天塩町)

2012年5月16日(水)～5月31日(木) / 美深町文化会館 COM100(天塩町)

2012年6月1日(金)～6月11日(月) / 剣淵町郷土資料館

2012年6月15日(金)～7月15日(日) / 名寄市北国博物館

2012年8月8日(水)～8月22日(水) / 士別市立博物館

2012年9月15日(土)～10月14日(日) / 富良野市博物館

2012年10月18日(木)～10月31日(水) / 旭川兵村記念館(旭川市)

2013年2月2日(土)～24日(日) / 旭川市博物館

2013年3月8日(金)～24日(日) / 増毛町総合交流促進施設元陣屋

(7) 政策提言

センターでは、各教員がそれぞれの専門知識を活かして、政府機関や自治体などに対し様々な政策提言を行っている。主なものは以下の通りである。

【国境・領土問題（岩下明裕）】

2005年以來、ロシアと中国、中央アジア、ロシアと日本の国境・領土問題についての政策提言を積極的に行っている。とくにユーラシアの国境問題の解決法の分析及び他地域への実践的応用の著書『北方領土問題：4でも0でも2でもなく』（中公新書）は大佛次郎論壇賞、日本学術振興会賞、日本の国境問題全体を扱った編著書『日本の国境・いかにこの呪縛を解くか』（北大出版会）は日本地方出版文化功労賞を受賞するなど、社会的に高く評価されている。前者については、中露の国境問題解決法である「フィフティ・フィフティ」（係争地をわけあって解決する手法）をもとに、北方領土を日露で分け合う提言であり、参議院の決算委員会を始め、議会の答弁などにそのアイデアが援用された。後者については、根室、稚内、小笠原、隠岐の島、対馬、竹富、与那国など国境自治体と研究機関、民間シンクタンク、学会（日本島嶼学会）を結ぶネットワーク（境界地域研究ネットワーク JAPAN）設立（2011年11月）の契機となり、同ネットワークは実務と研究を連携させ、国境地域振興づくりについて様々な提言を行っている。その存在と論議は、近年、議論がすすみつつある国境離島振興法についても影響を与えている。

【ロシア極東地域との交流（田畑伸一郎）】

2011年度から北海道・サハリン州友好・経済協力推進協議会の北海道側座長として、北海道とサハリン州との間における会合および北海道側の会合に参加し、友好・経済協力推進に関わる様々な提言やそのとりまとめに関与した。同様に、北海道・ロシア連邦極東地域経済交流推進委員会の委員として、北海道とロシア極東3地域（サハリン州、沿海地方、ハバロフスク地方）との間における会合および北海道側の会合に参加し、経済交流推進に関わる様々な提言の作成に関与した。

【中央ユーラシア外交（宇山智彦）】

日本の中央アジア外交について、欧米の代表的な中央ユーラシア関係シンクタンクである Central Asia-Caucasus Institute & Silk Road Studies Program の研究者たちの要請により、2007年に東京で国際ワークショップを共催した。日本政府に対し戦略的・現実的政策を提案し、また諸外国に日本の中央アジア外交の意義をアピールする意味で、アメリカと日本で出版したワークショップの成果は、中央アジア現地のシンクタンクなどの研究者にも引用されている。2008年のグルジア・南オセチア紛争の際には、日本の実務家が参加するシンポジウムや論壇誌等で、米ロ「新冷戦」論を批判し、小国・小地域側の事情を踏まえて情勢を客観的に理解する必要を訴える論陣を張った。また随時、日本の外交・国際協力関係者に中央ユーラシア関係の政策提言や知見提供を行っている。

6. 社会連携

【ハンガリーとの交流(家田修)】

日本ハンガリー友好フォーラム(2005-2007年)の日本側委員として日本とハンガリーの知的・文化的交流の活性化に関する提言をまとめ、両国首相に提言を行なった。このフォーラムは、2004年10月の日本・ハンガリー首脳会談での合意に基づき、両国間の交流強化のための提言を作成し、両首脳に提出するために設置されたもので、2005年11月に第1回会合(ブダペスト)、2006年12月に第2回会合(東京)、2007年11月に第3回会合(ブダペスト)が開催された。また、このフォーラムは、両国関係をこれまでの我が国からの体制移行支援を中心とする関係から、対話型の関係へ移し、知的交流の拡充、民間交流活性化を目指すものであり、EU(欧州連合)の新規加盟国との間で初めて設けられたものである。日本側座長は米倉弘昌住友化学社長・経団連副会長(現経団連会長)、また、ハンガリー側座長はヴィジ・シルヴェステル、ハンガリー科学アカデミー総裁(当時)が務めた。このフォーラムの成果の一つとして、東京にハンガリー文化センターが設置され、家田は運営委員を務めた。

【日本の地域研究の推進(家田修)】

日本学術会議第31期(2009-2011年)連携会員、地域研究委員会委員、地域研究基盤整備分科会副委員長として、地域研究委員会の政策提言に係わり、『日本の展望:学術からの提言2010』のうち「地域研究分野の展望」のとりまとめに参加した。また、第32期も引き続き連携委員として日本学術会議の政策提言作りに参加している。